2003 龍谷大学 国際社会文化研究所シンポジウム
日本のアジア報道・アジアの日本報道

日　時　　2003年10月22日（水）　午後1時～午後3時
場　所　　瀬田学舎　2号館120教室

挨　拶
　田中　滋（国際社会文化研究所 所長・社会学部 教授）
司会・問題提起
　卓　南生（国際社会文化研究所 事業部主任・国際文化学部 教授，元シンガポール「聯合早報」東京特派員）
報　告
　金　忠植（韓国・「東亜日報」東京支社長）
　「日本マスコミの北朝鮮関連報道」
　孫　盛林（中国・「人民日報」網絡中心：インターネットセンター 日本代表処代表，日本語編集部編集長）
　「インターネットがもたらす中国世論環境の変貌とその中の日本関連情報」
　永井　浩（神田外語大学教授，インターネット新聞「日刊ベリタ」代表，元毎日新聞バンコク特派員）
　「『日本の物語』としての東南アジア報道」

田中：はじめまして。私は，国際社会文化研究所所長の田中です。今日は，東京から来られた三人の先生方に「日本のアジア報道，アジアの日本報道」というタイトルでまずお話をして頂き，その後卓先生の司会で短い時間ですが討論を行いたいと考えております。



はじめに私から挨拶ということになるのですが，このタイトルではじめから難しい話というのもなんですので，ちょっとした私の経験を学生の皆さんにお話ししたいと思います。

東京の人は今開催されている日本シリーズ（阪神タイガース vs. ダイエーホークス）を醒めた目で見ているんだと思いますが，私は生まれたのが神戸で，元々は阪神ファンでした。今はどうなのかと言いますと，昨日，阪神が二回連続で負けると，ちょっと不愉快に

なったりもするのですが，今回阪神が十何年ぶりに優勝したということをすごくうれしいというふうには感じていないんですね。それではいつから私が阪神ファンでなくなってしまったのかと考えますと，十数年前にアメリカに行き，一年間滞在して日本に帰ってきたら，阪神ファンでなくなってたんですね。

なぜかなあ，と思って考えますと，アメリカに行って，東海岸だったんですけれども，狭い日本で関西，関東と意識するのが非常に馬鹿げたことに感じられてしまったんですね。私は関西のなかで神戸に生まれて，今大阪に住んで，京都の大学を卒業してとか，そんなふうにして関西の中をあちらこちらしていましたから，関西が大好きなんです。しかし，アメリカあるいはよその国々へ行くと，関西，関東というのがまったく意味を持たない，というのをひしひしと感じさせられます。

アメリカに滞在してさまざまな経験をしましたけれど，そのなかの一つが多くの友人を作ったことです。どんな人たちが私の友人になったのかというのを思い出してみますと，中国の人たち，韓国の人たちが，やはりかなり多いですね。

それと白人の人たちのなかでどんな人たちと友人になったのかと言えば，ユダヤ人の人たち，それから白人の中に一番とけ込んでいるはずなんですけれども，まだ白人のなかではちょっと違った扱いを受けているアイルランド出身のアメリカ人。アイルランド出身のアメリカ人で一番有名なのはケネディー大統領ですね。しかし，アメリカ社会のなかでアイルランド系のアメリカ人というのは，まだちょっと違った扱いを受けている。ユダヤ人というのも当然また違った扱いを受けている。

そして，韓国から来た人たち，中国から来た人たち，これも違った扱いを受けている，日本人もそうですけど。そういうやはり人間関係とそのネットワークがアメリカ社会のなかで本流からははずれた，そういう人たちとずいぶん親しくなりました。話が合うんですよね。そういう人々のなかでも会つてすぐ親しくなるのが中国から来た人たち，それから韓国から来た人たちです。これはほんとうに不思議です。今大リーグで松井とかイチローが活躍してますけれど，あの松井やイチローの活躍を，アメリカにいる韓国の人たちや中国の人たちのなかにも，同じアジア人が大リーグという檜舞台で活躍していると喜んでおられる方もおそらくたくさんいると思います。

だからそういう風に考えると，日本にずっといるとですね，隣の韓国とかその隣の中国というのは，以前からよく言われる言葉でいうと「近くて遠い国」なんですけれども，アメリカのような社会やヨーロッパに行ったりすると，ほんとうに同じアジア人だと感じるわけです。

私はアメリカに行ってる間に，私は日本人である前にアジア人だ，エイジアン（asian）だ，ということを痛感しました。そこで，ジャパニーズというのではなく，私はエイジアンだと感じるようになっていったわけです。

たった一年間のアメリカ滞在でしたが，そういったことを痛感したわけです。そこで，最初の話に戻りますと，アメリカから帰ってみると，エイジアンであるということと，阪神ファンであることの結びつきがあんまりなくなってしまった。その結果阪神ファンでなくなってしまったというわけです。野球のどこかのチームを応援して一喜一憂している生活というのはなかなか楽しいですから，そういう生活が出来なくなってしまった私というのはちょっと悲しい面もあるのですけれども，人間として一年間で一皮くらいは剝けたのかなあという思いを持って，今はその当時のことを思い出しています。

今日のシンポジウムは，「日本のアジア報道，日本のアジア報道」ということで，中国，韓国，

それから日本の三人の先生方にお話しをして頂くのですけれども，皆さんそれぞれに私が今話したことが三人の先生方の話のなかでどのように位置づけられるのかを考えてみてください。そして，「アジアの中の日本」という視点から，日本のアジア報道，アジアの日本報道をどのように見ることが出来るか，また，あなた方自身が，アジアの中の日本人として，アジア人として社会情勢，国際情勢をどのように見ることが出来るのか，そうしたことを少しでも考えるきっかけになってくれたら，今日のシンポジウムはそれだけで成功したんじやないかと思います。

それでは次に，今日のシンポジウムのコーディネーターをやって頂く卓先生から三人の先生方のご紹介をかねて話をして頂きます。卓先生，よろしくお願いします。

卓：今日のシンポジウムの司会を務める国際文化学部の卓南生でございます。日本とアジア諸国は近くて遠いとよく言われております。その理由としては，「誤解」や「相互理解不足」，あるいは「文化摩擦」がしばしば指摘されていると思います。この「誤解」とは何か，「文化摩擦」はどのようにして生じたのか，日本とアジアは果たして「近くて近い」関係になることは出来るのでしょうか。

実はそのような問題は20年前，あるいは30年前，私がまだ学生時代に，あるいは新聞社の現役の時代によく議論されたテーマなんです。その問題は実は私の隣の古い友人の永井さんと，ジャーナリスト同士の間でも，20年前から議論されてきました。いったいこのようなギャップが，うまく縮小するかどうか，その問題は実はかなり深刻ですね。

果たして問題は良い方向に向かっているのでしょうか，そういう問題をも含めまして，今日は三人の先生，日本報道の最前線にたつアジアの特派員とアジア報道に携わってきた日本のジャーナリスト，研究者の方々を東京からお迎えして議論したいと思います。

先ず，講師の紹介をさせて頂きたいと思います。一番左の金先生から。金忠植先生は現在，韓国の代表的な新聞社の一つ「東亜日報」の東京支局長です。彼は1953年全羅北道生まれ，高麗大学哲学科卒業，1978年から「東亜日報」の社会部，政治部の記者を務めて最年少の論説委員になりました。2002年１月から東京支局長になります。

今日，金先生のテーマは「日本のマスコミの北朝鮮過熱報道」です。今日はかなり短い時間ですが，持ち時間が一人12分くらい，その後一人ずつ５分間くらい議論させて頂きたいと思います。残った時間でフロアからの質疑応答をする予定です。それでは金先生お願いします。

金：時間にあわせて圧縮して議論させて頂きたいと思います。

一記者として日本の北朝鮮関係報道をみていて，四つの点で問題があると思っております。先ずは，報道内容の検証が足りない，次はフレームアップでしょうか，でっち上げみたいなことが激しい，三つ目はこじつけが多い，四つ目は興味本位の，煽る番組が多い，という点でお話をしたいと思います。

先ず検証が足りないという面では，北朝鮮からの亡命者，脱北者が多いことは，彼らの一部が日本のテレビ，新聞などでいろんな証言をしているところから出ています。その発言内容をジャーナリズムとして検証しないまま，垂れ流してしまうのが多いんじゃないかと思います。

例えば，日本の視聴者，新聞読者は北朝鮮の餓死者がほぼ200万人くらいだと理解していると思いますが，北朝鮮問題の専門家，例えばラジオプレスの専門家によると，実際にはその10％の20万人くらいあったかどうかぐらいだと分析しています。例えばあの，久米宏のニュースステーション

で姜某という脱北者が証言したのは200万人という話でした。その時の根拠はただ姜某さんという人間が，あちこちで聞いたと言うことを根拠にしていました。

もう一つの例を挙げますと，最近脱北者の女性が証言しましたが，彼女が政治犯収容所にいたという証言をしながら，なぜ逮捕されたのか，その理由を禁止された韓国の歌を歌ったからだと言ってました。テレビの字幕には「禁止曲」を歌ったためと出ていましたが，実際に彼女が言っていたのは韓国の歌，ホンドヤウルヂマラ，日本語では弟よ泣かないで，くらいの表現です。その歌はですね，実際植民地時代の歌で禁止曲どころか，今ピョンヤンで売っているテープにも収録されている歌で，それを歌ったことだけでは逮捕されるはずがないと思います。そういう検証不足の報道が多いという印象があります。

次にフレームアップ，でっち上げが激しいと思うのは，例えば今年二月の事ですか，東京新聞夕刊と産経新聞朝刊の一面記事でした。見出しは「北朝鮮元工作員逮捕，書類送検」という見出しでしたが，彼は1954年，密入国しそのあと朝鮮総連の活動家として活動してきたという内容です。

1950年以後，日本に入国した朝鮮の人々は100%密入国だと言えます。もちろん最近は別の話ですけれども，出入国法には時効がありません。そういうことから言えば，今の朝鮮総連の組織で働いた人々は，ほとんどが工作員になってしまうのです。ですから，新聞の記事では1954年に密入国して在日朝鮮人になりすまし，その後も活動したという報道でしたが，その工作内容に具体的に触れた部分が一行もありません。

もう一つ例を挙げますと，大型トレーラーを北朝鮮に輸出した，ということが大きく報道されましたが，軍事利用とか武器転用の可能性について意図的にそういう報道をしたとすれば，釘一本さえも武器転用になってしまう。記者である私にはそれはジャーナリズムの常識ではないと指摘しなければなりません。

三つ目。こじつけが多いという点では，例えば最近北朝鮮がドル不足で，ベトナムで国営レストランを運営し始めたという記事がありました。その記事のタイトルは「北朝鮮新たな外貨獲得に出た」とおどろおどろしいナレーションとともに，レストランの内部が映されましたが，その内容は別にどうということはありませんでした。国営レストランが外貨獲得をするのはある意味では当たり前だと思います。ウエイトレスを日本のテレビでは美女軍団という形で流しましたが，韓国のカフェでも日本のレストランでもどこでもウエイトレスは，まぁまぁ美女じゃないかと思いますね。

四つ目は，例えば喜び組のフィルムを繰り返し放映していますが，そのフィルムは，ちょうど11年前の韓国のテレビで放送された，同じフィルムですよ。でもこれを10年後，日本のテレビが，ニュースじゃなくて画面を繰り返して楽しむのは，先進国のテレビ番組として少し問題ではないかと思います。

もう一つは，今の金正日政権を批判するのは当然だと思いますが，批判しながら世襲政権，金日成の子どもとして政権を握ってきた，という話で批判するのは少しおかしいと思います。というのは世襲自体は韓国の政治家のなかで例のないことですから，韓国のジャーナリズムとか政治家が北の政権に対して世襲の問題を提起するのは当たり前だと思いますが，日本の場合，衆議院議員は，私が朝日新聞の政治部長から確認したところによると，36%くらいが世襲ですね。義理のおじさんなんかを含めますと，40%くらいが世襲になります。そういう形で世襲だけを根拠にして北朝鮮に皮肉を言うのは少し無理じゃないかという思いがあります。

卓：金さんありがとうございます。日本のマスコミの北朝鮮報道の問題として，信憑性が低いことなどを指摘してくれました。続きまして，「人民日報」インターネットセンターの孫盛林先生にお願いしたいと思います。孫先生は1961年，中国ハルピンに生まれ，中国人民大学新聞学部を卒業して，中国社会科学院大学院マスコミ学科修士課程を修了，「人民日報」論説部に入社しまして1990年から東京大学新聞研究所に留学し修士課程と博士課程を修了して，今は「人民日報」インターネットセンターの日本代表を務め，日本語編集部の編集長でもあります。

今日の孫先生のテーマは「インターネットのもたらす中国世論環境の変貌とそのなかの日本関連情報」です。

孫：みなさん，こんにちは。ご紹介にあずかりました「人民日報」社インターネットセンターの孫盛林と申します。今日のテーマは大きすぎてどこまで話せるか，ちょっと自信がないんですけれども，最初は多少の背景を紹介させて頂きます。

みなさんご存知のように中国は改革開放を謳いだして，今年で25年目に入り，今中国は計画経済から移行してる最中でございます。25年前までには我々の社会生活のなかでですね，商品という概念はありませんでした。商品そのものもなかったのです。全て製品，作ったものすべて製品なんですね。どこでどのくらい作って，どこに持って行って，どういう人たちに消費されるのか，はほとんど上からの計画によって行われました。それがどういうことを意味するかというと，もちろん我々は貨幣というものを持っているんですけれども，それでモノにも値段は付いていますが，その値段はですね，実際そのものの価値が反映していない値段なのです。例えばですね，私は中国の東北の出身なんですけれども，東北は冬になると暖房に石炭を使いますよね，その石炭はですね例えば一トンあたり，一千元としますね，そしてそれは生活の必需品ですから国の政策で実際我々の手に入る時には200円しか払わないとか，そういった価値と相反するような，運営の仕方だったんです。それによって中国の社会では商品は，商品というかモノは大変乏しい状態だったんですね，労働意欲もあんまり無くて。

私は15年前に日本に留学して来たんですけれども，当時中国からの，中国に帰る度に頼まれたことは，日本の電化製品が欲しいとかばかりだったんです。成田空港では，29インチとか，34インチのテレビを，すごくでっかいですけれども，持って帰る人をよく見かけました。今，中国も25年経って，日本にあんまり負けないくらいの商品が溢れてきて，現在私が帰国する時にですね，お土産に持って帰る物がないくらい，持って帰るといえば，日本の醤油とか，納豆とか，味噌とか，そういうものくらいしか持ち帰るものがないという感じになりました。

なぜこのような話をするかと言いますと，中国はこの改革開放によって，作り手本意の社会から受け手本意，買い手本意の社会に，100%ではないにしても，かなり変わりました。同様にマスコミ関係もそうですけれども，25年前までは中国のマスコミは，簡単に紹介しますと，新聞社ですと200社前後ですね，テレビチャンネルだと４，５チャンネルしか，はっきり調べていないからないですけれども，たしか４，５チャンネルしかなかったわけですね。それで今はどうかと言いますと，去年の数字ですが新聞社は2111社，雑誌社は8889社になっています。新聞社は2000社以上ですね，と言いますのは１社に一つの新聞だけではなくて，例えばうちの「人民日報」社の場合は，「人民日報」本紙以外，12の新聞を作っています。雑誌も九つですね。つまり新聞は13紙，雑誌は9誌作っている状態なんですけれども，これも計画経済からですね，市場経済に移行したのと同じように，

送り手本意の報道から，買い手本意ですね，読者の方の報道の方に移ったと考えて良いんですね。

例えばこの，「人民日報」の例を挙げますと，「人民日報」本紙がありますけれども，その本紙は48年の6月15日からずっとやってきたんだけれども，これはいわゆる硬い新聞というイメージがあります。この硬い新聞はだいたいどこで読まれるかというと政府機関ですね。それでは「人民日報」社はそういう硬い新聞ばっかりかと言いますとそうではなく，マーケティングの新聞の市場報とか，一般市民向けの「京華時報」，もっぱら北京市民を読者とする新聞なんですけれども，あとは国際ニュースばかり扱う「環球時報」とか色々あります。「人民日報」本紙は300万部ちょっとくらいですね，対してこのちっちゃな新聞はそれぞれ100万部とか，百何十万部とか売れています。そのような大新聞社にも普通の庶民の読む新聞，つまり庶民のマーケットを無視してはならないという新聞，それはもちろん大新聞，「人民日報」作る時にもこういう小新聞のことを考えながら，こう硬く書いちゃいけないですとか，そういう変化は少しずつ出てきております。

そのうちにインターネット時代に突入してしまいました。中国では日本とほぼ同じような時期にして1996年前後ですね，インターネットが発足して徐々にサイトは増えるんですけれども，「人民日報」はその中で1996年にその準備をして97年の一月一日から「人民網」，人民ネットというサイトを誕生させました。このサイトは日本のサイトと同じような，例えば「朝日新聞」のサイト，「読売新聞」のサイトと同じような所がある一方，かなり中国のインターネットサイトの特徴的な面が数多くあります。

まず第一に，例えば日本のインターネットサイトはですね，だいたいダイジェスト版，つまりそのサイトを運営しながら新聞を売らなければならないという観点から，サイトに上げるニュースはほとんど圧縮したり，カットしたりしています。速報性を重視していることもあるんですが，中国の場合は全文を掲載します。これは一つの特徴ですね。ユーザーにとってはうれしいこと，ありがたいとこですよね。

もう一つの特徴は全ての新聞，例えば「人民網」という「人民日報」のインターネットサイトは，「人民日報」の13の新聞と９つの雑誌全部に掲載しています。朝一番に，午前五時くらいに「人民日報」のペーパーを見なくても全てネットで見られます。それだけではなく「人民日報」社のサイト，「人民日報」だけのニュースかというと大間違いで，「人民日報」社は他の新聞社とか雑誌社，300社近くと記事交換契約をしていて，すべての契約関係の新聞社のものは「人民日報」社のサイトに集めているんですね。要は一カ所だけで中国全土のニュースを当日みられるというのが特徴です。それは「人民日報」だけではなく，中国のインターネットサイトを大きく二つに分けることが出来ますけれども，「人民日報」みたいにニュースサイトがあって，もう一方は商業サイト，ポータルサイトがあります。これは日本に「Yahoo!」というのがありますが，それと同じように商業サイトいくつかあります。この商業サイトも主な売り物はニュースなんですよ。彼らも全国から集めたニュースを一カ所にして，ユーザーに提供してるんですね。これが中国のインターネット環境です。

それで昔のものも長くサイトに遺してですね，あるニュースの全体像を見たい時にその前後関係とか，他の会社はどう紹介してるかとかですね，一目でわかるようになっています。私は日本にそういうサイトがあればいいなぁとずっと思いながら，自分がこういうインターネット関係の仕事してますから，技術的なことはわかっていますから，自分で一つのウインドウに「朝日新聞」も「読

売新聞」も「日経」も「産経」も一カ所に集めるようなファイルを作って，それをクリックすれば自分のみたい会社のホームページが全部はいるんですけれども，中国はサイト自体そういうふうに提供しているんですね。

これがどのようなことを意味するかというと，時間の関係で一つだけ言って，あとは次に回すようにします。大新聞も小さな新聞も全ての新聞がさっき言ったように2000社以上，三，四千の新聞が同じ場所でですね，競争することになっています。同じ事件についても，何百も，場合によっては千くらいの記事があるんですね。各角度から，各立場から，比較することが出来るんですね，そのことは非常に大きな意味を持っています。

卓：孫先生ありがとうございました。続きまして永井浩先生にお願いします。永井先生は1941年生まれ，東京外大ロシア科卒業，「毎日新聞」特派員，編集委員も務め，現在は神田外語大学教授，著書は『アジアはどう報道されてきたか』などがあります。日本のジャーナリストとして，特に日本のメディアのアジア報道の姿勢と，その本質的な問題点についてお願いしたいと思います。

永井：永井です。私の話のタイトルは「『日本の物語』としての東南アジア報道」となっています。なぜ「日本の物語」なのか。そのことを，日本の国際貢献というテーマについてメディアがどのように報じてきたかをみていくなかで，明らかにしていきたいと思います。

国際貢献という言葉は，みなさんも最近よく耳にすると思いますが，ようするに日本が国際社会でどのような積極的な役割をはたすべきかということでです。

国際貢献というものが本格的にメディアに取り上げられるようになったのは，カンボジアPKOへの自衛隊の派遣が最初です。1992年に長い内戦に終止符が打たれたカンボジアにPKO，すなわち国連平和維持活動が展開されることになり，そこに日本の自衛隊も参加することになりました。自衛隊の本格的な海外派遣の第一号です。その是非，とくに憲法との整合性を巡って日本の国論を二分するような大きな論議になりましたが，そのことはここでは省略します。

ここでの問題は，メディアがこのカンボジアPKOへの自衛隊派遣をどのように伝えたかということです。大半は，これが日本の国際貢献の第一号，試金石だという捉え方です。そして結果的にどういう報道の流れになったかというと，日本の自衛隊はカンボジアPKOで非常に立派な仕事をしたという評価を受けました。カンボジアPKOは成功だった，ということが現在の定説になっております。

これはメディアだけの評価だけではないようです。お手元に渡した資料には「戦後日本の平和構築事業への初めての本格的関与の成功」と記されています。これは『戦後日本外交史』という，有斐閣で出されている大学用テキストの一節です。この文章を書いているのは五百旗頭さんという神戸大学の先生で最近よくメディアに露出されている方です。これがおそらく，主流メディアにおける日本のカンボジアPKO参加についての代表的な見方だと思われます。

だけど，カンボジアPKOへの自衛隊の参加は本当にサクセス・ストーリーだったのかというと大いに疑問があります。私自身，この取材に参加しました。確かにカンボジアPKOが果たした役割は少なからず評価すべき点があるのですが，日本が自画自賛するような成功物語であるとは必ずしも言えないのではないかということです。どういう点が，という具体的な分析は時間の制約からここでは省きます。ただ，成功うんぬんと言う時には，どのレベルから誰の視点から見て成功なのか，そうでないのかが大切なはずですが，そういう視点が日本のメディアの報道，あるいは国際政

治学者と称する人々の視点からは完全にすっぽ抜けている。

またこれが仮に成功だったとしても，その光の部分の代償としてカンボジアの人々の中になんらかの問題も生み出されなかったのか，という影の部分の検証も必要なはずです。先ほど金さんが日本のメディアの特徴として検証の不足と言うことをあげましたけれども，そういう点がカンボジアPKOの報道についても非常に強かった。そもそも貢献というのは貢献する相手があってはじめて成り立つものです。ところが日本の報道は，「貢献する」側の論理だけでこれが成功したか，不成功だというふうに評価するわけです。肝心の「貢献される」側のカンボジア人は，日本の自衛隊をはじめとするPKO活動をどういう風に捉えているか，という視点が皆無ではないんだけれどもほとんど抜け落ちている。

日本のメディアの焦点は先ほどお話ししましたように，日本の初めての本格的国際貢献が果たしてうまくいくかどうか，そういうことのみに集中していくわけです。そもそもカンボジアってどこにある国なのか，どういう人々が何を普段食べてどういう宗教を信じているのか，どうやってお金儲けしているのか，そういうカンボジアの具体的な顔っていうのはぜんぜん，というかほとんど日本の人は知らなかったはずです。そこにある日突然，日本の国際貢献ということで自衛隊600人が派遣され，隊員たちの一挙手一投足をどうでもいいようなことまで含めて日本のメディアは一生懸命報道する。そして，貢献を検証するんでしたら，本来は多様な視点から報道しなければいけないんですけれども，そのあたりが完全に抜け落ちてしまっている。それでいて，自衛隊はよくやった，日本の国際貢献第一号は成功物語であった，と言うような報道に落ち着いてしまうわけです。つまり日本人が勝手に描き上げた「日本の物語」に終始してしまう。こういうメディアの姿勢は残念ながら，その後もずっと引き継がれているように思います。

去年，東ティモールに日本の自衛隊はまた派遣されました。ちょうど日本のPKOの参加が始まって10年っていうことで，日本のメディアが色々東ティモールでの自衛隊の貢献ぶりを報道しました。その中の一つに，「日本のPKO　10周年」というTBSの特集番組がありました。それを見ると，やはり日本の自衛隊が暑い東ティモールの地でどんなにがんばっているか，ということだけに終始した内容です。たとえば，自衛隊の人たちが橋や道路を造っているところを，東ティモールの職のない人たちが所在なげに眺めている光景が出ている。ではその人達が自衛隊の国際貢献をどういう風に思っているかというと，その貢献される側の肉声が一言も出てこないという，非常に不思議な番組です。

それで，わたしの学生に見せて何かおかしいことはないか聞いたら，誰も何も言わなかったけど，あれをそのままともに受け入れられてしまったら困る，ということで今のようなコメントをつけて学生に紹介しました。

つぎに，湾岸戦争への関わりから，現在のイラク攻撃への日本の国際貢献物語について簡単に触れさせて頂きます。実はこのカンボジアPKOへの自衛隊の派遣は，その前の1990年から1991年にかけての湾岸危機・戦争の時に国際貢献ということが日本でも叫ばれるようになってきて，その延長として実現したものです。その前提として日本のメディアではよく，「湾岸のトラウマ」ということが言われました。今回のイラクへの自衛隊の派遣についても，このことは盛んに強調されています。

湾岸のトラウマと何か。湾岸の危機から戦争にかけて，日本も国際貢献をするために自衛隊を派

遣するべきだという議論が政府・自民党の中でおきました。これは日本国内の違憲論やアジア諸国の懸念などに遭って実現しませんでした。そこで日本は，アメリカを中心とする多国籍軍に130億ドルという資金的な支援にとどめるわけです。ところがその後，日本の資金協力は国際社会から非常に低い評価しか受けなかった，だからこれからはお金だけの国際貢献というのは通用しない，ヒトの国際貢献も必要だと言うことが自民党や一部のメディア，あるいは学者から盛んに主張されるようになります。その延長線上で，人の国際貢献とは自衛隊の海外派兵である，ということになり，その最初の格好の舞台となったのがカンボジアPKOへの参加というわけです。

湾岸のトラウマというのは，この時，日本は資金協力をしたんだけれども国際社会ではあまり高い評価を受けなかったということから，日本の政府や外務省が非常に屈辱感をいだき，それがトラウマ，精神的な外傷となったというものです。これを克服するためにはどうしたらいいかと言うことで，今度のイラクにいたるまでの一連の自衛隊の海外派兵へと突っ走っていくわけです。

そのことについてはまた後でお話しするかと思いますが，ここで一点だけ確認しておきたいのは，国際社会とはなんなのか，ということです。「9・11」同時多発テロ後のアメリカのアフガニスタンへの報復爆撃，今回のイラクへの侵略についても，アメリカの軍事行動は国際社会の平和と安全のためということで，日本政府はこれを全面的に支持するわけですが，果たして国際社会って何を意味しているのか。湾岸のトラウマというときもそうですが，国際社会という中には，実はアメリカとその同盟国しかないわけですよね。

だから，アジアの視点というのはほとんど欠落している。先ほどお話ししたように，あるいはお手元の資料にあるように，自衛隊を湾岸地域に派遣することについてはアジアの多くの人々は危惧と憂慮を表明しました。これは卓先生の論文の中で詳しく分析されていますのでそちらに譲ります。ところが，日本が資金協力しかできなかったことがトラウマになったと言っている人々の頭の中からは，そういうアジアの視点というものはすっぽり抜け落ちている。それで日本は国際社会の中でこういう評価しかされなかった，という非常に一方的なゆがんだ国際認識を前提にして，だから日本は自衛隊の海外派遣を通じた国際貢献をもっと評価すべきだということになってしまうわけです。でも，今のような文脈で考えると，日本が湾岸に自衛隊を派遣しなかったことは，アメリカから見れば日本の外交は困ったことだ，ということになるかも知れないけれども，アジアの人々から見れば，これは非常に評価すべきことになるのではないでしょうか。だけどメディアには，そういう視点はほとんど無かったわけではないけど，非常に弱かった。その後そういう視点はどんどん弱くなっていき，今，平和憲法に違反してまでイラクに自衛隊を派遣するというときの報道に，果たして，どの程度のアジア，それ以外の地域の声が日本のメディアに反映されているか，というと非常に疑問だな，という感じがします。

卓：日本のいわゆる「国際貢献」にはアジアの視点が欠けている。すなわち，貢献する側の論理しかないということを永井先生は指摘してくれました。

これで一応三人の先生方に話をしてもらったわけですが，先ほど時間の関係で孫先生の中国インターネットにおける日本の情報についての話があまり語られず終わってしまいました。できましたら二三分間で，事例などを挙げて簡単に話して頂けないでしょうか。

孫：はい，わかりました。12分というのは本当に短いです。先ほど中国の社会の背景から，マスコミ界からインターネットのことを紹介したんですけれども，量が昔より沢山増えたと言ったんです

が，量だけの問題ではなくて，量は一定の蓄積を遂げると質的な変化ももたらすわけです。それで，早口で言いますけれども，インターネットのことですね，読者の方はものすごく強力なツールを手に入れたと考えて良いんですね。

さっき言ったように中国はニュースサイトと商業サイトですね，相互に競い合う状態になっていたら，みなさんご存知のように，皆さんもよく使っていると思いますが，インターネットというものはサイトをアクセスしなければですね，そのサイトの存在の意味すらないんですね。ですからみんな来なさいというふうに，読者のニーズに応えなければならない。というのが実際の現状なんですね。

また「人民日報」の例を挙げますが，中国のサイトはどんどんユーザー参加型のほうに移っています。一つは，ニュースの下にコメント，メッセージを残します。これは中国人の留学生なら見たことがあると思いますが，だいたいこのような感じですね。ニュースがあって，下に，こちらに小さな窓がありますね。ここに書き込みが出来ます。書き込んだらすぐにですね，このニュースの下に書き込みが反映されます。この下に他の人によって書かれたものも集まるようになっています。これで一目でみなさんが何に関心を持っているかもわかります。

あと，BBSはよく使われます。ユーザー参加型として，BBS，中国語ではモウンタンといってですね，議論する場所を提供すると。そうするとニュースを見た後に自分も感想があって問題を提起してたくさんの方が議論するんですね。「人民日報」にはキョウコクロンダンというBBSがあって，常に2万人から3万人が同時にオンラインしています。一人あたり，そこに一日30分くらいいるとしたら，一日に数十万人ですね，「人民日報」のサイトで議論することになっているんですね。それくらい強力な言論のプラットフォームになっているんです。

それがどういうことを意味するかというと，ニュースメディアはユーザー中心として，動かざる得なくなりますね。もちろん，やむを得ないという一面だけではなくて，積極的にユーザーの意志に応えるというのが送り手側にも，そもそもありますから，まさに良いツール，双方向的に，インタラクティブ的に使われていると考えて良いと思いますね。

具体的な例を二三挙げますけれども，つい最近のことですけれども，中国でハチユン事件というのがありまして，みなさんご存知かどうかわかりませんが，東北のチチハル市に工事現場で昔の日本軍の慰留した，毒ガスのドラム缶が五つ発見されました。発見した時に，みんなこれがなんだかわからないですから，この古いドラム缶をですね，リサイクル業の李さんに200元で売ってその李さんはドラム缶を分解する最中に中の液体が流れて，彼はかなり被害を受けたんですね。被害というかすぐに倒れて，嘔吐もして，皮膚にもできものがいっぱいできて。それと同時に周りの関連する人たちは，缶を触った人たちは，40人以上，被害を受けました。李さんはまもなく死亡したんですけれども，このハチユン事件，8月6日あたりですね，インターネットでですね，ある小さな新聞から報道し始めて，コメントが殺到したんです。

商業サイトでも，「人民日報」みたいな所でもBBSを使えなくなったくらい，みんな注目してですね。一つ数字をあげますが，中国は6月30日現在，インターネット人口は6800万人です。さっき言ったように「人民日報」のようなサイトですね，中国全ての新聞をそこで取り扱っているのと同じように，他のサイトもみんな同じようにしているんです。商業サイトももっと読者が使いやすいようにしてますから，全てのサイトを利用している人はこの事件に一斉に注目し，一ヶ月以上注目

し続けたんですね。今でもこの事件は完全に終わったわけではないんですけれども，私はちょうどその期間中国にいたので，日本側はその事件をどのように報道していたかわかりませんが，中国では，今「人民日報」が一番多いわけではないですけれども，商業サイトで検索したら，この件に関する報道は，おそらくこの一ヶ月間，一万件くらい，一万くらいの記事をですね，それぞれの新聞が出されたと思いますね。そして読者からのメッセージはそれ以上あります。

中国ではですね，インターネットを利用して賠償の抗議をするというグループがありまして，8月15日から9月15日の間に，サイトで署名を求めたんですね。それでこの一ヶ月間でなんと100万の署名を集めたんです。ここにちょっとした報道がありますけれども，この100万の署名，9月18日に日本の大使館でデモをしたいと，しかしそれは当局から許可が下りなくて，署名だけ日本大使館に渡したんですね。これは単なる報道だけではなくて，中国で日本の報道をどうこうするだけじゃなくて，インターネットというツールですね，インターネットのバーチャル世界に言論の自由が発達したら，ここまでなってしまうという，できるというか，なってしまうという一つの例ですけれども。

もう一つ，最近かなり注目された例ですけれども，9月16日にですね，ここの近くですけれども，大阪から300人くらいの集団買春ツアーが広東省の珠海にやって来て問題になりました。16日，17日，18日に日本に戻るまで二日間，そこに滞在して，中国人にとっても恥ずかしい話ですけれども，ある人がたまたまホテルで出会って，もう我慢できなくて，ある新聞社に通報したんですね。9月の26日に「中国青年報」が第一報を報じまして，同じ日にツアー団体の通訳を務めていた中国人，この人は漢民族じゃなくて壮民族，少数民族の一つですけれども，自分も我慢できなくて長い文章を，中国の商業サイトのBBSに出しましてですね，中国では大きな反響がありました。中国当局，広東省の珠海市の公安当局も全部動き出して，調査に乗り出したんですけれども，中国外交部もこれに対してコメントもしたんですね。日本のお客さんですね，中国に来たら中国の法律を守りなさいというようなことを，言ってですね，日本側に抗議の申し入れをしたんですけれども。

まだまだあります。これらのことがどのようなことを意味するかと言いますと，インターネットの世界では，普通のユーザーがインターネットの，なんていうんでしょう，ツールとして使ってマスコミにも，影響を与えたと，そして政府にまで影響を及ぼしたと言っていいくらいですね，実際，中日関係ですが，きわめて良好な関係にありまして，去年，中日国交回復30周年，今年は平和友好条約締結25周年にあたりますけれども，経済関係は去年既に一千億ドルの貿易額に達して，これは世界中でも珍しいくらいの良好関係ですよね。そして年間300万人くらいの往来がある状態なんですけれども，唯一残っていると言っていい問題として，やっぱり歴史の問題があります。

古い昔の傷がまだ治っていないというのがまだあってですね，それがこういうインターネットの時代になると非常に簡単に出来ますから，私は14年前に日本に留学にやってきた時に，東大の先生と中国の言論の自由について話をしたことがあるんですけれども，私はこういいました。言論の自由は当時中国ではある程度制約されているんですけれども，実際政府は中日関係をリードしているんですから，それは日本人民も戦争の被害者で，中国人民と同様に考えなさいと言うような教育を受けて，それを信じてきたんですけれども，今の若者は，社会も多様性になって，意見を出すようになって，しかもこういう時代になって，当時私が言ったのは，中国の言論の自由が更に開放されたら，たぶん中日関係をもう一度検討しなければならないんじゃないのか，と言ったことがあるん

ですね。

まさにですね，こういう良好な関係の中で，未解決の問題は，昔は日本の外務省，対中国の外交部で済むことが，今は普通の人々に対して何かやらなくてはいけない時代になったかなと思います。それは中国のとっても日本にとっても為政者とっては大きな課題であって，中日関係について言えば，中国の外交部と日本の外務省の課題ではあるかなぁと思います。

卓：中国の情報環境の変化によって，日中関係にも新しい問題がもたらされているということを指摘してくださいました。

それでは金先生も時間の制約で，お話がまだ終わっていなかったので，先ほどの続きをお願いしたいと思います。

金：日本外務省のホームページを読んでますと，北朝鮮との国交正常化がなぜ必要なのか，関係正常化をなぜしなければならないのかが書かれています。

要するに三点ですね，一つは戦後処理の終結。戦後50年を過ぎて，21世紀になってもこのような形での，一番近い地域との国交を非常識のままでおいてはいけない，という点。第二点は北東アジアの平和と安全保障，もちろんこれは核問題，ミサイル問題を含む表現だと思います。第三点は懸案の問題の解決。ここには不審船とか，拉致問題があると思います。ですから，日本の近代から現代に至るまでの国際外交の主役として活動してきた外務省の専門家が日本の国益がどこにあるのか，何が国益なのかを長い間，研究してこのような形で整理したのが，ホームページにのせられていると思います。

今の日本のマスコミ，メディアの報道姿勢を見ていますと，これは商業的な志向ばかりです。私もセンセーショナルな，商業的な，という面では決して自由ではないですが，日本のためにも今のようなマスコミの報道姿勢は望ましくないことだと思います。

例えば5月ですか，韓国の大邱でのスポーツ大会で北朝鮮から美女軍団がやってきました。その一部が金正日さんの写真が雨に濡れていたのを見て，泣きながら大騒ぎしたのを日本マスコミはご存知のとうり大々的に報道しました。それは北朝鮮という国が今の時代にいかに不思議な，いかに独裁体制で普通の国とはいえないか，ということを見せているのだと思いますが，それ自体を日本のマスコミは，北だからこういう形だと非難し一方的な形で報道しました。私が話したいのは，先進文明国として，世界一流の産業国家としての日本の目で北を見ると，そういう形だけしか見えない。

例えば，韓国のジャーナリストとして私が日本を見ますと，こんなにも先進文明国である日本で皇太子の子どもの愛子さまに，いつも敬語を使いながら，また，特別のページを作って報道するのを見ると，雨に濡れている将軍様の写真をみて泣く北朝鮮の少女もそれ程おかしいとは思えない。韓国の目ではそのように見えます。

北朝鮮という50年間の共産独裁体制，世界で一番危険な「爆発物」みたいな国だから，この問題児を引き出すためにいかに努力を重ねていくか，という見方が今の外務省の方針であり，日本小泉総理の訪朝であったと思いますが，今のマスコミの報道を見ると逆に視聴率のために，新聞部数を増やすために，意図的にいじめたり，いろんな扱い方をするというのが私の感じた点です。

卓：北朝鮮に関する異常な報道について，時間のゆとりがあればさらに金先生にお話いただきたいと思いますが，まずは日本側から，日本のアジア報道とはどういうものなのか，もう一度永井先生

にお願いしたいと思います。

永井：先ほど，日本の東南アジア報道というのはしょせん「日本の物語」ではないかということを，国際貢献論にそくして話しました。つまり，日本がアジアを報道対象とする時，実は対象の側から内在的にアジアを捉えようとするのではなくて，日本，それも日本の政府であるとか外務省のプリズムを通してアジアを捉えようとする傾向が強い。だからアジアを報道したつもりでも，何のことはない，結局日本を語るためにアジアを，極論すれば，利用している側面がある。そしてもう一つは，アジアをふくめた日本の国際認識にはアメリカのプリズムを通した捉え方が非常に強いのではないか，それがさらにわれわれの正しいアジア理解を妨げているような気がするという点です。

そこで，今，孫さん，金さんが指摘された日本とアジアの間にある認識ギャップの事例をふまえて，もう少し私なりに考えてみたいと思います。お配りした資料の一つ，この漫画も見てください。これは湾岸戦争に日本の自衛隊を送るという議論が沸騰した時，マレーシアの新聞に載った漫画で，作者はラットという，マレーシアを代表する漫画家です。国際貢献の名の下に，日本軍がクウェートまで突っ走っていってしまうのではないかという懸念を描いた作品です。

この漫画で興味深いのは，ここに描かれた日本人のイメージです。おそらく君たち若い人が見てもこれが日本軍だというイメージが浮かばないと思うのです。実はこれは大東亜戦争が始まったと時に日本軍がマレー半島を南下した時の姿です。当時「銀輪部隊」，銀輪とは自転車のことですが，自転車に乗ってマレー半島を南下した日本軍は，行く先々で中国系の住民を大虐殺していったという過去があります。我々はもうそういう歴史についてほとんど知らないのだけれども，マレーシアの人から見ると，自衛隊がペルシャ湾岸に派遣されるのではないかという時に，真っ先にイメージされるのは戦争中のこういう日本軍の姿です。そういうところにも認識のギャップが現れているのではないかという一例としてご紹介しました。つまり，アジアと日本をへだてる溝として歴史認識のギャップがある。

問題は，このようなギャップをいかにして克服していくかです。そのためにはさまざまな分野での努力が必要だけど，ここではメディアに関してそのことを考えてみたいと思います。もちろん大手メディアの人々にきちんとした報道をしてもらうことは大切だけど，われわれ一人ひとりにもできることがあるはずです。

その点で，孫さんが言われたようにインターネットという新しいメディアは大きな可能性を秘めたツールではないでしょうか。みなさん既にご存知のように，インターネットは国家や国境の壁におかまいなしに，国内はもとより，もっとグローバルに，一人ひとりの市民同士の情報や意見の交換を可能にしてくれるツールです。人類が持った新しい画期的なメディアだと思います。

そういう新しいメディアを通じて中国では，例えば日本人が中国で最近恥をさらした集団買春であるとか，毒ガス遺棄の問題について，政府レベルとは違うかたちでいろんな情報が流布されるようになってきている。孫さんが言われたように，中国で更に言論の自由が進み，もっと多くの人がインターネットを使いこなすようになれば，市民レベルでの日中の様々な情報交換が自由に出来るような時代がくるのではないでしょうか。もちろん言葉の壁は残りますが，今よりは相互の市民レベルのコミュニケーションが進むのはまちがいない。そうすれば，今までの政府レベルとは違った日中間のコミュニケーションの回路をつうじて相互の認識のギャップも少しずつ埋めていけるかもしれない。孫さんがいう，これまでの両国関係の見なおしにまで進んでいくかもしれない。そこか

ら，本当の意味の国際貢献とはなにかも見えてくるはずです。

私自身は，そういうことも視野に入れながら，仲間と最近，インターネット新聞というものを始めました。既存の大手メディアではなかなか取り上げられないけど重要な情報や，おなじ出来事でも別の角度から見た情報の発信をめざしています。まださささやかな試みですが，そういう動きがあちこちで積み重なっていけば，これまで述べたような一面的なアジア報道もしだいに通用しなくなっていくのではないでしょうか。「日本人の物語」としてのアジア報道ではなく，真のアジア報道が生まれてくるはずです。

インターネット新聞については，それが最も大きな影響力を発揮しているのが韓国なので，もし時間があれば，後で金さんに話して頂きたいと思います。

卓：今ですね，永井先生が紹介してくれた漫画，マレーシアの非常に有名な漫画家であるラットさんが書いたものです。彼はマレー人で，華人ではないですね。日本のメディアはステレオタイプなところがありまして，マレーシアで日本に対して批判的なのは華人だけで，マレー人は日本の国際貢献万々歳，みたいな書き方をするんです。だからこの漫画を見ていかに現地とのギャップがあるかよくわかるんですけれども，しかし，日本に批判的なこのようなラットさんの漫画でも10年前なら日本の大新聞がどこか載せる可能性がありました。

それではフロアからのご意見，ご質問を受け付けたいと思います。

質問者A：社会学部の李相哲です。日本の報道はみなさんよく知ってると思うんですが，そのようなギャップが両方に，深刻なギャップが存在すると思うんですね。そこで金先生にお聞きしたいんですが，そういうギャップを埋めるために，現地に来ている記者でもいいですし，「東亜日報」としては何か積極的な取り組みとかございますでしょうか。

金：そのギャップは主観的な認識の問題ですね。それは客観的な問題と違い大変難しい差があると思います。例えば同じ時期の20世紀の歴史においても日本の歴史認識と，韓国や中国の認識は差があるんです。ですから未だに認識のギャップが解決されていないまま，共同歴史研究会みたいな形を政府レベルで作ったりしています。マスコミに携わっている私も一番痛感していますが，例えば自分の国の国民のエモーションに乗って記事を書けば新聞は売れると思います，日本でも韓国でも。「反韓」「反日」の旗を揚げているのはやっぱりマスコミだと思います。

日本でも70年代は韓国が批判の的でしたね。今は北朝鮮になっちゃいましたが。ですからマスコミの記者達が結局両国の国民の間で架け橋の役割をしながら，認識の差を縮めるようと努力しなければならないと思いますが，実際はその反対の方向が多かった，と思っております。李先生の指摘のとおり21世紀という時代は20世紀，19世紀という民族主義の時代とか冷戦時代のこととは異なる時代なんで，国境も意味がだんだん無くなる時代，人もモノも金も国境無しで流れる時代，そんな時代にもっと変わると思っておりますが。

質問者B：「東亜日報」の金先生にお聞きしたいんですが，金さんが仰ってるとおり，日本のマスコミの北朝鮮の報道は，良い悪いは別にして，大変幼稚な報道ばかりであるというのは私も感じていますが，実は私が韓国を離れたのは７年半くらい前です。７年半くらい前だったら韓国のマスコミ，韓国の国民が拍手をするところだったんですよね。でも今だったら金さんのような批判が出てくる，それは韓国自体が非常に変わっているんじゃないかと思うんですが，そこら辺を教えて頂けませんか。

それは韓国のマスコミが成熟したのか，あるいは韓国のマスコミ，国民がある意味で北朝鮮に対して非常に弱くなっているところがあるんじゃないのか，そういうところをお教え頂きたい。

金：そのとおりだと思いますね。1970年代は，今の日本のマスコミも「朝日」「毎日」は親北みたいでしたね。「産経」と「読売」は，「読売」はちょっと違いますけれども，「産経」は絶対韓国の味方でした。でも今は北が4社の標的になって，韓国がむしろ北を「同情」する形になりましたが，背景はあると思います。一つは冷戦の終り，それが原因だと思います。例えば韓国は10年前まで北を敵として70万の軍人が毎日訓練したり，国家予算の10％くらいを投入しながら戦争に備えてきました，という雰囲気でした。しかしある日突然ソビエトが崩壊して，次の日，中国が資本主義化して，実際共産圏の中心的な国はなくなりまして，その辺境の北朝鮮というキューバみたいな国が存在している。そういうのを実感したのが韓国の90年代，91，92年でした。だから韓国人の自覚は我々は何をしてきたのか，という自己反省でしょう。自己を振り返ってみる機会を持ちました。それが一つの原因だと思います。二つ目の原因は，韓国の兵役制度は国民，男全員が軍隊に入らなければならない義務，徴兵制ですから，韓国の若者はみな若い時代の三年くらいを軍隊で服務しなければならないですね。

そこで二つの現実を実感するのです。一つは現代の戦争がいかに危ないか。昔は永井先生が見せてくれたマレーシアの自転車部隊みたいにね，地上戦を展開して，高地を占領して，それを拠点に戦う戦争でしたが，今の戦争はいわゆる「ボタン戦争」です。ボタン戦争って誰も責任を感じないまま何万人，何十万人を殺す，そういう現代の武器システムの怖さを実感しているのが今の韓国の若者だと思います。ですから韓国がどうして北に対する曖昧な態度なのかをたまに質問されますが，日本で報道されているのは，同胞だから，同じ民族だからという形で単純化して解釈するのが普通です。それは誤解だと思います。韓国で戦争を怖がるのは今の政治の中心になっている，いわゆる3，8，6世代をはじめ，現代戦争の怖さを実感している人口が世界で一番多い国だと思っております。しかも韓国の軍隊が，韓国自体も学歴社会ですが，大学生以下，高等学校卒業生くらいは別の，公益勤務くらいで役所なんかで勤務して兵役を果たしますけれども，軍隊に入れるくらいの若者はみんな大学生以上ですね。一番感受性の鋭い，しかも頭も良い学歴もある若者が軍隊で全員みなさんのような大学生，あるいは卒業生が，ソ連もなくなった，中国もなくなった，今北朝鮮と言う一番危ない孤児，あるいは問題児に対して我々が何をやっているのか，という疑問でしょうか，感じていますので，そういう国の独特な面を見なければ，日本人と韓国の温度差を埋められないと思っております。

質問者C：さっき日本の報道で美女軍団の写真の話が出てきましたけれども，日本の皇族に敬語を使って報道するのがそれとあんまり変わらないという話が出てきましたが，日本の報道が天皇とか皇族に特別な扱いをしていることについて，韓国で報道をすることがありますか？

金：特にありません。韓国では隣国の天皇とか皇室について，それは日本独特の歴史であり，伝統であるのでそれについて批判したり，反感を持ったりするのはマスコミとして扱わないのが普通だと思います。でも，新聞によっては天皇という表現を使ったり，若干反日読者を意識している新聞では「日王」という形を使う新聞もあります。

元々は天皇という形で表現しましたが十何年前歴史教科書の問題があってから，一部新聞がイギリスのQueenも北欧のKingも全部，「王」という表現をするので，英語をそういう形で翻訳する

と王じゃないか，日本の天皇も王じゃないかという形で「日王」を使いますが，「東亜日報」は天皇という形で使っております。なぜかというと韓国の政府が金大中政権以来，日本固有の文化を尊重してそのまま天皇という形で公式的に呼ぶのが良いと決めたので「東亜日報」も政府の表現どうりにしたのです。

質問者D：孫先生が日本のインターネットについて，「朝日新聞」の記事が縮刷だ，短縮だと仰いましたけれども，少なくとも4年前まではインターネットに載るのは詳しい情報でした。それで新聞に載るのはむしろ編集のせいで縮んでしまいました。そのことを先ず訂正しておきます。

それからキム先生のお話について今日の感想として，日本の，ということでしたが，マスコミは世界中でそういうバイアスを持っているんじゃないだろうか，先ほど中国で製品から商品になったというお話がありましたが，それがマスコミなんですね。報道の内部にいた人間からすれば，先ず第一に真実を報道したい，それからマーケットが何を望んでいるか，その接点のようなところでいったい何を書くかを探している，それがマスコミで，そういう立場から日本のマスコミは日本のストーリー，アメリカのマスコミはアメリカの読者の，韓国のは韓国の，そういうふうになるんじゃないかなと。

それが今インターネットでどうマスコミが変わるのか，そういうのを感じさせてくれて大変有り難かったです。

卓：それは質問ではなくコメントですね。あと5分しか残っていないので，若者から。

質問者E：インターネットにより，読者が誰でも言論に参加できるようになりました。その中で中国人が日本に反発するようなことが徐々に書かれるようになっていると思います。そこで「反日情報」が上がってくることが問題になってくると思います。その時BBS管理者はどう管理するか，どうコントロールするか，それが聞きたいです。

卓：時間の関係で，一人一分ずつ，総括も含めて回答をお願いしたいと思います。

孫：「朝日」の記事について，一言だけ言わせて頂きたいんですけれども，私は15年くらい前ですけれども日本に来た時，ビックリしたのは日本のマスコミはほとんど同じような口上でモノを報道しているなぁという感じでした。私はやっぱり多様性が求められるべきだと考えるんですけれども，色々日本の記者クラブ制度とか原因があるだろうが，その点で私は日本に長くいても理解できない，なんで同じような報道しかなされていないというのは問題じゃないかなぁと思いますね。

それと，さっきのBBS関連ですが，実際これほど親密な経済関係，人的交流がありながら未解決の問題は政府の力で押さえ込んできているんですね。その辺で今反発になってきているのは確かです。だから今むしろ，残してきた問題に直面しなければならない，これは今後解決していけるんではないかと良い方に考えます。あとBBSの管理ですけれども，BBSは基本的に管理が不可能ですね。あれだけ書き込みがあって，どんな編集者がいても間に合わないですから。極端な文化，中国でも日本の天皇は天皇と言いますが，中国は多民族の国家で，少数民族とか他民族との付き合いの中で，民族の風習はなるべく尊重するようにと言うのがあってですね，民族問題とか国家を倒すとかそれを先導するというような極端な言論しかカットできないですから，実際のところ。

これからユーザーの数がもっともっと増えていくでしょうから管理しにくくなると思います。一分間は過ぎたと思いますが，最後に一言，僕が持ってきた中国外交部のスポークスマンの中日関係の間でハチユン事件の処理は一致したと，というニュースの下に，何分間かの間にこれだけ書かれ

たんですよ，こんなに書かれているんですね。色んなことが書かれています。そこに私は希望があると思います。

永井：吉村さんが言われたことについては確かに同意できる点があります。どこの国のメディアであっても国益を超えられない，更にマーケットのニーズを睨みながら情報を発信している。最近の例で言えばアメリカのイラク攻撃に対するアメリカ・メディアの報道が一番グロテスクな形でそれを露呈しています。だけど我々がこれから目指さなければいけないのは，何が国益なのか，今までのような狭い意味での国益で良いのか，という問いなおしです。さまざまな分野でグローバル化が進む国際社会の中で，真の国益というものを考えていかなければいけない。

マーケットや読者のニーズということについても，おなじことが言えます。既存の大手メディアという特権的な場所にいる人間たちが，あたかも読者国民のニーズを全部把握しているような思い上がり，これこそがニュースだと勝手に定義していたのが現状です。でも，読者や視聴者が本当に求めているニュースというのはそれだけなんだろうか。私自身，そういうメディアで仕事をしていたので，そこを離れた今，あらためてそのことを痛感します。現在の既存メディアの情報をすべて否定するなんていうつもりはないけど，いままでのようなニュースだけでは市民には通用しないような時代になってきています。そこで我々は市民の目線からあらためて国益とはなんなのか，ニュースとはなんなのか，ニーズはなんなのか，そういうことをこれからはみんなで議論していかなければいけないのではないか。その一つの手段としてインターネットというのは有効な手段ではないかと思っているわけです。

金：拉致と外交は次元が，ディメンションが違うと思います。今の日本の世論の流れを見ると，拉致と外交の問題が少し区別できない状態になっている。それをマスコミが商業的に煽っているんじゃないか，そういう面でお話を致しました。吉村先生の指摘については，マスコミは元々オピニオンとファクト，意見と事実の関係の二つの柱があるので，私が批判的に報告いたしましたのは，事実関係をエモーショナルな解釈で利用するのが危ない，という点でした。

卓：皆さんのおかげで大変盛り上がりました。時間の関係でここまでにしたいと思います。